2020年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

大学生の歯科口腔保健に関する行動変容に影響を与える要因について

■主任研究者　浅野妙子

■共同研究者　松下英二

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

目的

大学生の歯科口腔保健行動はどのような経緯で形成されているのかを明らかにするために、先行研究について文献レビューを行い、大学教育における歯科口腔保健行動について今後求められる研究およびその方向性について検討することを目的とし研究を行った。

方法

文献レビューは次の１～３について検討を行った。

１.大学入学前までの歯科口腔保健の意識・行動と教育内容・効果（文献数：24 件）

２.大学生の歯科口腔保健の意識・行動と教育内容・効果（文献数：10 件）

３.大学の専門教育における歯科口腔保健の意識・行動と教育内容・効果（文献数：36 件）

本年度は、「1. 大学入学前までの歯科保健の意識・行動と教育内容・効果」について、大学生の歯科口腔保健行動の基盤となる小学校～高等学校においての意識や行動変容に重要となる要因や教育効果を文献レビューにより検討した。また、大学入学前の経験が大学生の歯科口腔保健行動にどのような影響を与えるかを文献レビューにより検討した。

結果・考察

　文献レビューにより、以下についての見解が得られた。

歯科保健行動の意識や行動は、小学校低学年では保護者の直接的なサポートにより行われる保護者依存である。高学年では歯磨きにおいては保護者依存から自己責任にシフトしていく時期であり、この時にセルフエスティームや自己管理スキルが高まるように保護者は間接的にサポートしていくことで行動変容を促すことができる。

中学～高校に関しては、すべての歯科保健行動が成人に向けて保護者依存から自己責任で行えるようにシフトしていく時期である。これには子の自律的健康観が重要であり、家族全体での健康意識の向上や、歯科保健行動に関する知識や技術の再教育が重要である。